



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	ツガン=バラノフスキ-めぐる崩壊論争の一考察
Author(s)	佐藤, 博
Citation	北海道大學 經濟學研究, 9, 19-63
Issue Date	1955
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/31019
Type	departmental bulletin paper
File Information	9_P19-63.pdf



ツガン・バラノフスキーをめぐる 崩壊論争の一考察

佐藤 博

目次

はしがき

一、いわゆる「崩壊論争」の問題点

二、ツガン・バラノフスキーの「崩壊理論」

三、L・ブーダンのツガン批判

四、ツガンのブーダンに対する反批判

五、A・パンネコエクのツガン批判

六、ツガンによる「窮乏化理論」批判

七、カウツキーのツガン批判

—— 窮乏化と崩壊 ——

八、結 論

は し が き

本稿の課題は、ツガン・バラノフスキーをめぐる「崩壊論争」において、論争に登場した諸家の見解が如何なるものであつたか、如何なる論点が問題となり、またその論点に対して如何なる解決が試みられたか、を明らかにするにある。

ここにいうツガン・バラノフスキーをめぐる論争とは、一九〇四年のツガンの論文「国民経済理論より見た資本制秩序の崩壊」(『社会科学および社会政策アルヒーフ』第十九卷⁽¹⁾)にはじまり、ブーダンの「カール・マルクスに反対する数学的範式」(『ノイエ・ツァイト』第二五卷第一号、一九〇七年⁽²⁾)それに対するツガンの反批判「常識と科学真理」(『ノイエ・ツァイト』第二六卷第一号、一九〇八年⁽³⁾)、パンネコエクのツガンの著書「マルクス主義の理論的基礎」(一九〇五年⁽⁴⁾)に対する批判「ツガン・バラノフスキー氏のマルクス批判」(『ノイエ・ツァイト』第二八卷第一号、一九〇一年⁽⁵⁾)、およびツガンの「現代社会主義論」(ロシア語版一九〇六年、ドイツ語版一九〇八年⁽⁶⁾)と、それに対するカウツキーの批判「窮乏化と崩壊」(『ノイエ・ツァイト』第二六卷第二号、一九〇八年⁽⁷⁾)にいたる一系列の論文で行われた論争を指すものである。

「崩壊論争」史におけるツガンの段階は、この論争における第一段階たるカウツキー——ベルンシュタイン論争に後続し、後半のローザル・クセンブルクをめぐる論争につらなり、この論争の特色ある一段階を構成する。崩壊論争の全学説史は、この段階の具体的な解明なしには、明らかにされ得ない。

ツガンをめぐる論争は、これを広義にとれば、後続する崩壊論争の諸家の見解の中に、再三再四反覆される論点として現われており、我が国の福田——河上論争にまでおよぶものであるが、我々は上述の諸論文の範囲内に問題を限

定し、より一そう積極的な考察はこれを他日に期したいと思う⁽⁸⁾。

この論争の過程を追跡するために、本稿はつぎのことを構成をとる。

いわゆる「崩壊論争」の発端とみられるベルンシュタイン——カウツキー論争における論点を摘出し（第一節）、つぎに、我々が既に紹介せるツガンの「崩壊理論」が⁽⁹⁾前記のベルンシュタイン——カウツキー論争と如何なる関連にあるかを明らかにし（第二節）、このツガンの「崩壊理論」に対するブーダンの批判（第三節）、とそれに対するツガンの反批判（第四節）、およびパンネコークのツガン批判（第五節）を紹介する。最後に、ツガンの「現代社会主義論」における窮乏化理論批判（第六節）とそれに対するカウツキーの反批判（第七節）を取上げる。かくて我々のツガンをめぐる崩壊論争の段階を終り、そこで我々の一応の評価を試みる（結論）。

- (1) Michael Tugan-Baranowsky, Der Zusammenbruch der kapitalistischen Wirtschaftsordnung im Lichte der national-ökonomischen Theorie. Archiv für Sozialwissenschaft und Sozialpolitik. Bd. XIX. 1904.
- (2) L. B. Boulín, Mathematische Formeln gegen Karl Marx. Die Neue Zeit. XXV. Jahrg. 1. 1907.
- (3) M. Tugan-Baranowsky, Gesunder Menschenverstand und wissenschaftliche Wahrheit. Eine Erwiderung. Die Neue Zeit. XXVI. Jahrg. 1. 1908.
- (4) Michael Tugan-Baranowsky, Theoretische Grundlagen des Marxismus. Leipzig. 1905.
- (5) Ant. Pannekoek, Herrn Tugan-Baranowskys Marx-Kritik. Die Neue Zeit. XXVIII. Jahrg. 1. 1910.
- (6) M. I. Tugan-Baranowsky, Sovremennyy' Sotsializm v svoem istoricheskom razvitii. St. Petersburg. 1906. deutsch übersetzt., Der moderne Sozialismus in seiner geschichtlichen Entwicklung. Dresden. 1903.
- (7) Karl Kautsky, Verelendung und Zusammenbruch. — Die neueste Phase des Revisionismus. Die Neue Zeit. XXVI. Jahrg. 2. 1908.
- (8) 「崩壊論争」の概括的紹介は次のものの中に見られる。

Henryk Grossmann, Das Akkumulations- und Zusammenbruchsgesetz des kapitalistischen Systems (Zugleich eine

ツガン＝バラノフスキーをめぐる崩壊論争の一考察

佐藤

Krisentheorie), Leipzig 1929, Kap. I.

Paul M. Sweazy, The Theory of Capitalist Development, London 1949, Chap. XI. The Breakdown Controversy, pp. 190-213.

なお、ツガンを中心とするものについては、

和田佐一郎、ツガンの恐慌論を繞りて、東北帝国大学研究年報「研済学」3、一九三五年、参照。

再生産論を中心とする論争史については、

岡稔、再生産をめぐる論争史、講座「資本論の解明」第三分冊、参照。

我が国における「蓄積＝崩壊理論」をめぐる論争については、

寺島一夫、蓄積論の視角における現代日本、叢文閣版「経済評論」一九三四年、一号―三号、および第三号の附録、参照。

(9) 拙稿、ツガン＝バラノフスキー「国民経済理論より見た資本制秩序の崩壊」について、北海道大学「経済学研究」2、参照。

1. つわゆる「崩壊論争」の問題點

いわゆる「崩壊論争」は、十九世紀の末葉、資本主義の独占段階、すなわち帝国主義段階への移行とともに発生せる「修正主義」と「正統派」マルクス主義との闘争の一産物である。従つて、ツガンをめぐる崩壊論争を考察せんとする我々は、論争におけるツガンの地位、問題提起の必然性を明らかにするために、ツガン登場以前のこの論争の経過を一応ふりかえらねばならない。

すでに一八九六年（エンゲルスが死んで一年のち）以来、「ノイエ・ツァイト」誌上で「社会主義の諸問題」Probleme des Sozialismus なる標題のもとに「修正主義」的見解を一連の論文の中で発表しつつあつたベルンシュタインは、一八九八年十月三日から八日にいたるシエトウツトガルトの「ドイツ社会民主党々大会」の席上へ、「修正主義」に対する攻撃を弁明するための一書信を送つた。この「弁明」は席上でベーベルによつて読み上げられたが、その中で、

ベルンシュタインは次のように云つている、――

「吾々がまもなく予期されるところのブルジョア社会の崩壊に直面しているという見解、および社会民主党がかか
る迫り来る社会的大破局 *grosse soziale Katastrophe* という見透しによつてその戦術を決定したり、或いは依存す
るという見解には、私は反対する。このことこそ私の全面的に譲らない点である。」

このようなベルンシュタインの「見解の基礎づけに捧げられた」のが、「社会主義の諸前提と社会民主党の諸任
務」*Die Voraussetzungen des Sozialismus und die Aufgaben der Sozialdemokratie. I, Aufh, 1899.* である。

本書において、ベルンシュタインは「吾々がまもなく予期されるところのブルジョア社会の崩壊に直面しているとい
う見解を反駁するために、マルクス主義を全面的に「修正」せんとする。そして、特に「資本制蓄積の一般的法
則」を「修正」するために、「所得統計」をもち出したり、恐慌の「資本主義への適応」を論証するために、次のよ
うな事実に訴える。すなわち、「世界市場の強力な空間的拡張は、通信および運輸交通に必要な時間の異常な短縮と
結びついて、混乱調整の可能性を大いに増進せしめないかどうか、またヨーロッパの諸工業国の驚くべきほど増加し
た富は、現代信用制度の伸縮性および工業上のカルテルの勃興と結びついて、地方的ないし特殊部門の混乱の一般的
景気状態に及ぼす反作用を非常に減じたために、少なくとも当分の間は、以前の如き種類の全般的産業恐慌は到来す
る可能性がないのではないか」と「疑問」を提起している。

これに対して、カウツキーは、自己のベルンシュタイン批判を「ベルンシュタインと社会民主党綱領」*Bernstein und das sozialdemokratische Programm. 1899.* の中でまとめて展開している。

その中で、カウツキーは、先ずベルンシュタインの「資本制蓄積の一般的法則」の「修正」に対して、所謂「相対的窮乏
化理論を以て応え、「不斷に増加するものは、生理的窮乏ではなくて社会的窮乏である、すなわち、文化的諸欲望と、

個々の労働者のそれらを満足させる手段との間の対立である、換言すれば、労働者の所有に帰する生産物の量は増加し得るが、労働者によつてつくられた生産物量に対する労働者の分け前は減少するのである。「私の考えでは、以上のことが、マルクス主義批判家が名づけて以て窮乏理化論となすところの、かのマルクス学説だと思ふ。」⁽³⁾と述べている。

次に、恐慌の「緩和」に対して、カウツキーは「資本の集積と社会的対立の尖鋭化との理論に対して、週期的経済恐慌の理論はただ二次的性質をもつに留まる。これは前者の展開の効果を強化し、資本の集積過程を促進し、生産者の数とその状態の不安とを増加する。しかしこの展開の終局はたとえ週期的恐慌が必然的に資本制生産株式の本質に基礎づけられていなくとも何ら変るところはないであらう」となして、「マルクス・エンゲルスの崩壊理論の最初の構成以来、プロレタリアートの成熟と勢力の増大の理論こそ、この学説の本質的構成部分をなしている。」⁽⁴⁾と述べている。

ところが、ベルンシュタインは、このカウツキーの「崩壊理論」の理解に対して、「プロレタリアートの成熟は、決して経済的要因ではなくて、倫理的要因であり、その勢力は政治的或いは社会政策的要因である」と反批判する。このようなベルンシュタイン、カウツキーの「崩壊論争」の論点に対して、ツガンは、如何なる「理論構成」を以て登場するか？

- (1) Eduard Bernstein, Die Voraussetzungen des Sozialismus und die Aufgaben der Sozialdemokratie. 3. Aufl., Berlin 1923. Vorwort zur ersten Auflage. S. 6.
- (2) a. a. O., SS. 113-114.
- (3) Karl Kautsky, Bernstein und das sozialdemokratische Programm. 1899. S. 128.
- (4) a. a. O., S. 135.

(5) a. a. O., S. 45.

(6) Eduard Bernstein, Zur Geschichte und Theorie des Sozialismus. 2. Aufl. Berlin-Bern 1901, S. 294.

二、ツガン「バラノフスキー」の「崩壊理論」

吾々は、既に、別稿「ツガン「バラノフスキー」『国民経済理論より見た資本制秩序の崩壊』について」(北海道大学経済学研究、2)において、ツガンの「崩壊理論」の「理論構成」を紹介し、若干の批評を試みているので、ここでは主として以下のツガン批判の対象となる点と、先に述べたベルンシュタイン、カウツキー論争との関連の指摘を中心にツガンの所説をとりまとめることにする。

ツガンが「ロシアにおける資本主義論争」に登場し、更に「崩壊論争」に介入する機会を与えたものは、カウツキーによるツガン恐慌論の批判であつた。

その時、すでにツガンは「修正主義」の理論内容をわがものとなして、労働価値説の修正を始めていた。(註)一九〇四年にドイツ語で、「社会科学および社会政策アルヒーフ」誌上に発表されたツガンの論文「国民経済理論より見た資本制秩序の崩壊」は、その一つの成果である。

その論文において、ツガンは唯物史観が資本主義の崩壊を「純粹に経済的」に「証明」するための「歴史哲学」であると規定し、マルクス、エンゲルスの「崩壊理論」に二つの「理論構成」を認め、その一つは「資本制生産のための販路欠乏の理論」他の一つは「利潤率低落の理論」であると云う。

この二つの「理論構成」を批判し去ることによつて、ツガンは独自の「理論構成」を提起する。まず、ツガンがどのようにして「資本制生産のための販路欠乏の理論」を批判するかを見よう。

ツガンの批判の唯一の方法は「マルクスのお手本にならつて構成された」と称する「表式」である。そこで、ツガンは「資本制生産のための販路欠乏の理論」を批判するために、労賃が著しく減退し、資本家の消費が不変である場合ですら「販路欠乏」が起りえないことを「証明」するために、次の表式を構成する。⁽⁴⁾

労賃が減退し、資本家の不生産的消費が不変な場合における拡大された規模での社会的資本の再生産

第一年度

$$\text{I. } 1632p + 544a + 544r = 2720$$

$$\text{II. } 408p + 136a + 136r = 680$$

$$\text{III. } 360p + 120a + 120r = 600$$

第二年度

$$\text{I. } 1987,4p + 496,8a + 828,1r = 3312,3$$

$$\text{II. } 372,6p + 93,2a + 155,2r = 621$$

$$\text{III. } 360p + 90a + 150r = 600$$

第三年度

$$\text{I. } 2585,4p + 484,6a + 1239r = 4309$$

$$\text{II. } 366,9p + 68,9a + 175,5r = 611,3$$

$$\text{III. } 360p + 67,5a + 172,5r = 600$$

この表式において、ツガンは次の如く「仮定」する、――

(1) 労賃は、価格で毎年二五%低下する。

(2) 第一年度の資本家の総利潤の $\frac{1}{4}$ が蓄積され、 $\frac{3}{4}$ が不生産的に消費される。⁽⁵⁾

これらの「仮定」の下に前記の表式で計算した結果、ツガンは次の「結論」に到達する。

「社会的生産の拡大は社会的消費の減退と連携して進行する、しかしながら生産物の供給と生産物に対する需要は完全な均衡に留まる。」「かようにして、吾々は、たとえ社会的消費の著しい絶対的減退にあつても資本制経済が崩壊

社会的労働生産性の低下の
場合の社会的資本の再生産

第一段階

$$\text{I. } 250p + 125a + 125r = 500$$

$$\text{II. } 112\frac{1}{2}p + 56\frac{1}{2}a + 56\frac{1}{2}r = 225$$

$$\text{III. } 37\frac{1}{2}p + 18\frac{3}{4}a + 18\frac{3}{4}r = 75$$

$$400p + 200a + 200r = 800$$

第二段階

$$\text{I. } 277,8p + 125a + 97,2r = 500$$

$$\text{II. } 125p + 56,3a + 43,7r = 225$$

$$\text{III. } 500p + 225a + 175r = 900$$

$$500p + 225a + 175r = 900$$

しないということを知る。⁽⁶⁾
 このようなツガンの「証明」を彼は「厳密な数学的証明」であると誇っている。
 次に、ツガンの「利潤率低落の理論」批判に進もう。
 「利潤率低落の理論」批判のために、ツガンは再び「厳密な数学的証明」に訴える。
 ツガンは「先ず第一に、マルクスの問題提起が間違っている」、と主張する。何故なら、マルクスは不変資本に対して資本の賃金部分の相対的減少のため資本の有機的構成の高度化することによって、利潤率は低落するとい
 うが、資本の賃金部分の相対的減少は、労働生産性が低下する場合と、逆に向上する場合、の二つの場合から起り
 える。然るに、マルクスは、労働生産性の向上する場合における利潤率の変動を論じようとして、労働生産性の低下す
 る場合を論じてしまった。すなわち、ツガンの「表式」は、労働生産性の向上の場合には利潤率の上昇を、労働生産

性の低下の場合には利潤率の低落を、「証明」するといっているのである。⁽⁷⁾

右の表式において「例えば、鉱山や土地が利用し尽された結果、鉄鉱石、石炭、穀物およびあらゆる原料の獲得の労働諸費用 *die Arbeitskosten* が甚だしく増加し、そのことが生産物単位の労働価値 *der Arbeitswert* を二五%増加させる。そのことは資本家をして、彼の利潤の一部を、その生産費に対応して増大する物的資本 *Sachkapital* および賃金資本 *Lohnkapital* の産出にふりむけることを余儀なくさせられる。私は更に、資本主義の現実により接近するために、各生産物単位（従つてまた労働者の消費手段も）の労働価値の増加が労働者の実質賃金（すなわち労働者が処分しうる消費手段の量）を約一〇%減退させると仮定する。⁽⁸⁾」

この「仮定」に基づく「表式」の計算は、第一段階では利潤率が $\frac{200}{600} = 33.3\%$ であつたのが、第二段階では $\frac{175}{725} = 24.1\%$ に低落していることを「証明」する。⁽⁹⁾

ところが、労働生産性向上の場合における表式は次の如くである。⁽¹⁰⁾

社会的労働の生産性の向上
の際の社会的資本の再生産

第一段階

$$\text{I. } 250p + 125a + 125r = 500$$

$$\text{II. } 100p + 50a + 50r = 200$$

$$\text{III. } 50p + 25a + 25r = 100$$

$$400p + 200a + 200r = 800$$

第二段階

$$\text{I. } 222,2p + 88,9a + 88,9r = 400$$

$$\text{II. } 97,8p + 39,1a + 39,1r = 176$$

$$\text{III. } 180p + 72a + 72r = 324$$

$$500p + 200a + 200r = 900$$

第三段階

$$\text{I. } 177,8p + 78,2a + 144r = 400$$

$$\text{II. } 78,2p + 34,4a + 63,4r = 176$$

$$\text{III. } 144p + 63,4a + 116,6r = 324$$

$$400p + 176a + 324r = 900$$

右の表式は、労働生産性が二五%向上し、「賃金鉄則」の「信奉者と見られないために」実質賃金が一〇%騰貴すると「仮定」するならば、利潤率は、第一段階の $\frac{200}{600} = 33\frac{1}{3}\%$ から第二段階では $\frac{324}{576} = 56\%$ に上昇したことを「証明」する。

以上の如く、ツガンは「厳密な数学的証明」すなわち「表式」によつて「崩壊理論」の二つの「理論構成」を批判し去つた後に、ベルンシュタインの拒否した「倫理的要因」を自己の「崩壊理論」の「理論構成」の中に持ち込む。但し、それはカントの倫理学によつて「基礎づけ」られたものとして⁽¹⁵⁾。

かくてツガンは次の結論に到達する。

「人類は決して盲目的基本的な経済諸力の贈物として社会主義には到達しないであろう、しかし、新しい社会秩序を目的意識的に獲得せねばならぬ——従つて闘争せねばならぬ⁽¹⁶⁾」

さて、以上述べた如きツガンの「崩壊理論」は、ベルンシュタイン、カウツキー論争と如何なる連繋をもつか？

ツガンは、唯物史観を以て、資本主義の崩壊を「純粹に経済的」に「証明」を与える「歴史哲学」と理解する。かくて「人間の意識」と「物質的生活の諸矛盾」とを切り離して考えることによつて、「原因、結果を固定した互いに対立した極」となし、「交互作用を全然盾過する」という「普通の非弁証法的な觀念」を以て唯物史観を理解する結果、ツガンはベルンシュタインの「カントにかえる」方向を一そう補強する⁽¹⁷⁾。

更に、ツガンは、「マルクスのお手本にならつた数学的表式、すなわち、我慢すよい紙の上の足し算引き算の計算練習」(ローザ・ルクセンブルク)によつて、ベルンシュタインの「修正主義」に、より「厳密な数学的証明」を与えようとする。すなわち、カウツキーの「過少消費説」的恐慌論を以つて、マルクスの「崩壊理論」の「理論構成」の一

つであるとなして、ツガンの「表式」の計算は、社会的消費が絶対的に減退しても、「販路欠乏」は起りえないことを「証明」するが故に、資本主義の崩壊も「純粹に経済的」に「証明」されないと主張する。次ぎに、再び「表式」を用いて、「利潤率の傾向的低落の法則」をも「修正」する。すなわち、ツガンの「表式」の「証明」するところによれば、労働生産性の低下の場合においてのみ「利潤率の傾向的低落の法則」が「妥当する」というのである。

我々がここに取上げたツガンの論文においては「資本制蓄積の一般的法則」に触れていないが、その法則の批判は一九〇八年に発表された（ロシア語版は一九〇六年に出ている）「現代社会主義」の中でなされている。

ツガンは、結局、資本主義の崩壊を「純粹に経済的」に「証明」することは出来ないとなして、カントの倫理学から借りてきた「倫理的規範」を以つて、ベルンシュタインの拒否した「倫理的要因」を自己の「崩壊理論」の中にとり入れる。

このようなツガンの「崩壊理論」は当然、「正統派」の多くの批判を呼び起すこととなつた。

- (1) 前掲拙稿、一四四ページ以下、参照。
- (2) ツガンは、一九〇一年に、既に「私はマルクスの剰余価値説の土台の上に立つものではない」と言明して、一八八九年五月にロシア語で発表せる論文「マルクスの抽象的資本主義論の基本的誤謬」および、一九〇〇年三月に発表せる「価値法則と利潤率」なる論文の参照を求むところ。Vgl. Tugan-Baranowsky, Studien zur Theorie und Geschichte der Handelskrisen in England. Jena 1901. S. 18 Anmerkung. ditto; Theoretische Grundlagen des Marxismus. Leipzig 1905, S. 186. Anmerkung.
- (3) Tugan-Baranowsky, Der Zusammenbruch u. s. w., S. 275. 前掲拙稿、一五一ページ参照。
- (4) Tugan-Baranowsky, a. a. O., SS. 284-285. この表式の詳細な解説については、福田徳三「社会政策と階級闘争」四九五ページ以下参照。なお、山田盛太郎「再生産過程表式分析序論」二〇九ページ以下参照。
- (5) Tugan-Baranowsky, a. a. O., S. 248.
- (6) a. a. O., S. 286 und 288.

- (7) a. a. O., S. 296. 前掲拙稿、一六〇—一六一ページ参照。
- (8) a. a. O., SS. 297 f.
- (9) a. a. O., S. 298.
- (10) a. a. O., SS. 300 f.
- (11) a. a. O., SS. 304 f. 前掲拙稿、一六二ページ参照。
- (12) a. a. O., S. 306.
- (13) 前掲拙稿、一五〇ページ参照。

三、L・ブーダンのツガン批判

P・M・スィーシーは、その著「資本主義発展の理論」で、特に一章をさいて「崩壊論争」the Breakdown Controversy に当っているが、その中で、L・ブーダンの崩壊論争史上の位置について、次のように云っている、——

「ベルンシュタイン論争の大騒ぎが終つて、正統派マルクス主義者の理論の相対的に安定せる理論状況が生じた。

恐慌や資本主義の崩壊についても、それはカウツキーが一九〇二年に提案した見解に厳密に従つた。ルイス・ブーダンはかかる理論的安定期の適切な代弁者であつた」⁽¹⁾

ツガン、ブーダン論争は、このような「理論的安定期」の所産である。すなわち、ツガンは、一九〇五年に、われわれが前節で紹介せる「崩壊理論」批判と、唯物史観および労働価値説の批判とを併せて、「マルクス主義の理論的基礎」なる一冊の書物にまとめて発表した。この書に対して、「正統派」の「適切な代弁者」たるブーダンは論文「カール・マルクスに反対する数学的範式」⁽²⁾の中で、とくにツガンの「崩壊理論」に対して全面的な批面を加えている。

最初に、ブーダン¹⁾は、ツガンがマルクスの「崩壊理論」の一つの「理論構成」と見做す「利潤率低落の理論」を「擁護」せんと試みている。

すなわち、ブーダンは「ツガンのマルクス批判の最も独創的な点は、彼が利潤率低落の理論を拒否した点である」、と指摘し、更に、ツガンが「利潤率低落の理論」を拒否せんとする意図は、剰余価値説をも否定しようとするからである²⁾と断ずる。しかも、ツガンのそのような剰余価値説の否定は、資本制経済秩序が「価値法則に内在せる矛盾」の結果、崩壊するということをも否定せんとするものであると、ブーダンは追求している³⁾。

ブーダンによれば、ツガンの方法が、従来のマルクス批判と異なるのは、彼が「マルクス学説に絶対的数学的反駁を与え」ている点であるという。

然らばツガンの「マルクス学説の絶対的数学的反駁」に対して、ブーダンはどのような反批判を加えようというのであろうか？

ブーダンは、ツガンの「社会的労働生産性の向上の際の社会的資本の再生産」の「表式」を引用して、

(1) 数字の吟味

(2) 方法論の吟味

(3) 表式の「前提」の吟味

の三点に分けて批判する⁴⁾。

(1) について。利潤率が第三段階で上昇したのは、「簿記上のからくり」によつてである。何故なら、第一段階で生産手段が五〇〇あつたのが、第三段階では四〇〇に減少している。これをツガンは労働生産性の向上のために、価値がそれだけ減じたと説明するが、「価値の減少が産出高の増大に正確に照応するならば、資本家は自ら何故価値を『節

約』せんと努力するのか」とブーダンは尋ねる。更に、総生産物は、第三段階では九〇〇になつてゐるが、これは「減価」されて八〇〇になるべきである。そうすると、利潤は二二四となり、第三段階の利潤率 $\frac{224}{576} = 39\%$ は第一段階の利潤率 $33\frac{1}{3}\%$ と余り変らない筈である。このようにブーダンには先づ批判する。

(2) について。「だが、ツガンーバラノフスキーの数字に決して彼の主要な誤りがあるのではない。たとい彼の数字が正確であつたとしても、彼の証明は同様にごまかしである。彼の誤謬はむしろ次のような彼の方法にある、——すなわち、その方法こそ、数字がただ数学的に正確である限り、全く勝手気ままに、仮定をつくつたり数字を利用したりさせ、しかもそれで以て社会的諸現象を証明させるものである、だが、その際、ひとは、社会的諸現象を全然黙殺して、社会法則を論理的数学的公式や計算で証明しえないということを、彼は全く忘れてゐる」、とブーダンは批判する。

(3) について。第一に、ツガンは、社会的生産物を資本に転化するか、それとも資本家の消費のフォンドにするか、を仮定する際に余りに「軽卒」である。資本家が突然第一段階の利潤の半分を「節約」というような「行為の仕方」は、何がそうさせるのか？ 第二に、ツガンが資本家をして「節約」させたのは、「奢侈財生産」部門においてである。すなわち、第一段階では $(250 + 125 + 100 + 500) = 525$ を「生産的」資本に使つてゐるのに、第三部門にはただの七五しか使つてゐない。それが、第二段階では資本が一〇〇だけ増加したのに、四四八が「生産的に」使用され、二五二が資本家の消費フォンドの生産にむけられてゐる。第三に、ツガンは、「静態においては一般的利潤率が社会的資本の構成に依存してゐない」ことを「証明」する「表式」では、「資本の構成は個々の経営において異なるばかりでなく、また社会的生産の部門全体においても異なる。吾々は生産手段の生産において不変資本が最も大きな役割を演じ、支配階級の消費手段の生産（従つて奢侈品生産）にあつては、これは最も小さな役割を演ずると仮定することが

できる」といつているのに、このことをツガンは全然忘れてしまつて、三部門とも資本の構成を等しいものと「假定」している。第四に、第三段階で、第三部門のみ生産手段が増加しているが、これは労働生産性の向上のために起きたとすれば、価値がそれだけ低下する筈だから、「一体、〔第三部門以外の——引用者註〕他の部門におけるより多くの利潤なるものはどこから生じたか？」とブーダン⁽¹⁾は疑問を提起している。第五に、注目すべき点は、労働者の実質賃金が一〇%増加するという「假定」の「勝手きまなこと」Geringfügigkeitである。マルクスは勿論「賃金鉄則」の信奉者でないから、そのような「假定」をする必要はない。

以上の如く三点からの吟味を終つて、ブーダンは、以上のツガンの「利潤率低落の理論」批判に対する反批判を要約する。

マルクスは資本の構成は資本の増大によつて、しかもこの増大という原因によつてのみ、高度化する、と云つてゐる。ツガンのように資本家の「節約」によるのではない。しかもツガンは「節約」された資本は第三部門にのみ移ると「假定」しているが、「このような『節約』の実験は一度も試みられなかつた」し、またこのような「節約」によつては「必然的に資本の全面的潰滅と資本家種族の絶滅へ導いたであろう」、とブーダンは云う。最後に、「特に最近における資本の巨大な増大に直面しているという事実と、ツガンの『表式』を対比して、『本当に不思議だ！』と結んでいる⁽²⁾。

次に、ツガンの「資本制生産のための販路欠乏の理論」批判に対する、ブーダンの反駁に移ろう。

ブーダンは「吾々は検討に入つて行くまえに、問題の完全な定式化における一つの欠陥、それによつて問題全体が誤れる方向にむけられるという一つの誤謬を指摘せねばならぬ」、と前置きして、ツガンは「経済的發展を機械的の發

展と混同して、「機械的」崩壊理論を以て、「マルクスの資本制経済様式の崩壊にかんする理論」と理解している、といつて非難している。⁽⁶⁾

そしてブーダン自身の「崩壊理論」の理解を次のように示している。

先ず「経済学批判」の「序文」Vorwort におけるいわゆる「唯物史観の公式」として知られている部分を引用し、ブーダン自身の「解釈」によれば、そこでは「資本制生産の存続の絶対的不可能性」についてマルクスが語っているのではなく、ツガンの如く、社会の歴史的發展の中に「機械的過程」を見るものでないと、説明する。そして更に続ける、——「マルクスが資本主義の純粋に経済的な過程（すなわち、商品の生産および価値の実現）にかんして、その体制の究極的崩壊との関連において語る場合には次のことを意味する、——この体制の生産能力がただ現存する自然的生産諸力によつてのみ、すなわち労働者階級の与えられた範囲での、労働生産性によつて制約される限り、また他面において、生産された価値の実現は、生産諸力と同じ歩調をとらない消費者の購買力によつて制約される限り、この体制はそれに内在する矛盾の上に基礎をおいている。従つて、消費者の購買力、すなわち、価値実現の能力が絶対的生産諸力の水準以下に低下するや否や、この価値実現の態様 *Modus* は、資本主義体制の本来的秩序を生産の桎梏とする、けだし、資本主義の支配下にあつては、諸商品は価値増殖をなしえないように生産されることはないからである。かくして資本蓄積の法則に従うと生産の能力と価値増殖の能力との間の差は不斷に大きくなるから（そこでは前者が不斷に増大するが、後者は絶えず減退する）、この桎梏は結局、体制全体が崩壊せねばならぬ程絶大となる。」⁽⁷⁾

かくて、ブーダンはツガンの「表式」の検討に移る。⁽⁸⁾ 彼はツガンの「表式」を引用してながながと説明を加えたのち、次の疑問を発する、——「この新たな余分の労働者は、全期間にわたつてどこから移ってくるのか？」すなわち、ツガンの「表式」では、労賃が毎年二五%ずつ低下するのであるから、第一年目には、八〇〇の賃金資本で八〇〇人

の労働者、第二年目には、六八〇の賃金資本で、九〇七人の労働者、第三年目には、六一一の賃金資本で一〇四人の労働者を必要とする等々。従つて、ツガンが暗々裡に、労働者の供給源として「別の世界」を前提にしていることを問わないにしても、労働者の「これまでの郷里」よりももつと急激に賃金が切下げられるようなところへ、「労働者の生理的労働能力をも損わずに、」如何にして労働者が移つてくるか、が疑問であるとブーダン⁽⁹⁾は云う。

ところが、ツガンの「道德家的性格」からそのようなことは、ありえないことを「保証」できる。すなわち、ツガン自身は表式が資本主義の現実⁽¹⁰⁾に基礎を⁽¹¹⁾おいていないことをよく知つている。ツガンの「表式」は「マルクスの学説の全面的に支持し難いことを白日の下に曝す」という目的のためにのみ「構成」されているからである。従つて、ツガンの表式は「労賃が不斷に著しく減退し、同時により多くの労働者階級が存在するという仮定の下でのみ一般的に企てられうるものにすぎない、」とブーダンは主張する。

次いで、ブーダンは、「吾々は、資本家がツガン・バラノフスキーをその顧問に採用し、そして生産物を、彼の表示に従つて『配分』するという場合を考える。一体何が起るだろうか？」資本家が、以前には消費手段の生産に向けていた労働者をより多くの機械の生産にふりむけるとすれば「より多くの機械は如何なる目的のために使用されるのだろうか。」勿論、社会的消費を増大したり、減少させたりするためではない。より多くの機械を売らんがために生産するのである。だが「それこそ全問題中の問題なのだ！」とブーダンは叫ぶ。「ツガン・バラノフスキーの表式では消費財に対する需要が無視されている。」従つて、ツガンの忠告に従つて資本家は三年間生産を続ける。そして「表式」によれば、四三〇九の機械を生産する。「だが、彼の資本家たちは彼に云うであらう、彼はそこで苦々しい誤ちを見出す、——すなわち、その莫大な機械は以前の僅かのものより価値がなくなつた、何故なら、そこでは消費が減少し、かくて売るべき財の生産のために今やかの時よりも少ない機械が使用されるから、従つて、利用されないものはまた

価値のないものである。」

かくして、ブーダン⁽⁹⁾は結論に到達する。すなわち、ツガンの「熱愛する」表式は「彼が彼の時代の病気にとりつかれていて、その病気の最も重要な症状は修正主義である、——すなわち、『倫理的なもの』への病的な憧れ、『実際的なもの』へのヒステリー⁽¹⁰⁾的追求である」ことの産物であることを示す。ツガンの「実際的なもの」の追求は、「樹を見て杜を見ない」結果をもたらす。換言すれば、ツガンは資本主義の発展において、第一部門のみが大きな比重を示すという「樹」を見る、だが、作りだされた第一部門の莫大な生産物が「何故」、「何のために」生産されるかという「杜」を見ない。かく結論して、ブーダンは更に続ける、——「これらの莫大な量の生産手段は……それらが生産されるところの資本主義の内部において使用されるのではない。それらは資本主義国で生産されて、目下資本主義になりつつある過程の国々に輸出されるのである。」⁽¹¹⁾

かくして、価値実現の可能性を「非資本主義的諸国」への輸出に求めんとするブーダンのツガン批判は、カウツキ⁽¹²⁾によつて定式化された「過少消費説」を、ローザル・クセンブルクの「自動的崩壊理論」へ架橋するための、一つの重要な媒介の環を形成することになる。

- (1) Paul M. Sweezy, *The Theory of Capitalist Development*. London 1949, p. 201.
- (2) L. B. Boudin, *Mathematische Formeln gegen Karl Marx*. Die Neue Zeit. XXV. Jahrg. 1. 1907.
- (3) L. B. Boudin, a. a. O., SS. 525 f.
- (4) a. a. O., SS. 531 f.
- (5) a. a. O., SS. 534 f.
- (6) a. a. O., SS. 558.
- (7) a. a. O., SS. 558-559. Cf. ditto, *The Theoretical System of Karl Marx*. Chicago 1907, p. 14 and pp. 163 f.

ツガン＝バラノフスキーをめぐる崩壊論争の一考察 佐藤

(8) L. B. Boudin, Mathematische Formeln gegen Karl Marx. Die Neue Zeit. XXV. Jahrg. 1, SS. 564 f.

(9) a. a. O., S. 566.

(10) a. a. O., SS. 603 f.

(11) a. a. O., S. 604. Vgl., Ross Luxemburg, Die Akkumulation des Kapitals. 1921, S. 290. Anmerkung. ローザは「この文章を引用して次のように云っている、——『ブーダンはこの点、国際資本主義の発展における大きな結びつきに、重要な眺望を与えている。さらに彼は、この関連において、論理的に帝国主義の問題に到達している。……ブーダンが、カウツキーと全く同様に、生産手段の部門が消費手段の部門に比してより急速に増大するという法則は、ツガン＝バラノフスキーの思い違いだと考えているということ』を、確認しておかねばならぬ。」

(12) 拙稿、ツガン＝バラノフスキー恐慌論にかんする一考察、北海道大学「経済学研究」5、一五四ページ参照。

四、ツガンのブーダンに対する反批判

前述の如く、ブーダンは、ツガンの「崩壊理論」に対して、全面的な批判を加えているが、これに対して、ツガンも一九〇八年に、「ノイエ・ツァイト」誌上で「常識と科学的真理」なる標題の論文で応じている。この論文の中で、彼は何ら重要な変化を「崩壊理論」の中に示していないが、彼の「表式的方法」の「方法論的意義」が一そう詳細に展開されている。従つて、この論文を紹介することによつて、ツガンの「表式にたいする熱愛」の所以が明らかになる。

ツガンのブーダンに対する反批判は、吾々が前節で取り上げた殆んどすべての論点について行われているが、「利潤率低落の理論」にかんする問題点と、「資本制生産のための販路欠乏の理論」にかんする問題点とに分けて行つてゐる。吾々は以下順次に紹介してみよう。

その前に、先ずツガンの、ブーダンの批判の方法に対する一般的特徴づけを見よう。

「彼は、私が抽象的論議において出発点とする大抵のものを許さるべきものと認める、彼は私の論証の中に全然あるいは殆んど論理的誤謬を立証さえもしない。ところが、彼は結論にくると、如何にして全論理的推論が馬鹿げた結果に導きえたかを明らかにしようともせずに、全体が無意味であることを見出す。」⁽¹⁾すなわち、ツガンにとつては、出発点たる前提が承認されるものであるなら、論証の「論理的誤謬」が指摘されない限り、その批判を容認し難いといふのである。

さて、いよいよツガンのブーダンに対する反批判の内容に入ろう。

先ず、「利潤率低落の理論」について。

前節で見たように、ブーダンは、ツガン批判を、(1)数字の吟味、(2)方法論の吟味、(3)表式の「前提」の吟味、の三点から反批判しているが、吾々はここでは、ツガンのブーダンに対する反批判を、(1)と、(2)および(3)を一緒にして紹介する。

(1)数字の吟味。ツガンはブーダンが「一つの数学的誤謬」を指摘していることを容認する。だが、ツガンはそれにも拘わらず「私の表式の証明力を何ら止揚するものではない」と主張する。その理由は、ブーダンの訂正によつても利潤率は三九%となり、もとの利潤率三三%より上昇することを「証明」するといふのである。⁽²⁾

また、ブーダンの「簿記上のごまかし」であるとの批判に対して、ツガンは次のように反批判する。

「ただそれは私の方法ではなくて、マルクスの方法なのだ、ブーダンはマルクスの価値論を忘れてゐる。」すなわち、マルクスの価値論によれば、「社会的総生産物の価値はあれこれの部分の価値の変化には全然無関係であり、ただその生産に投下された労働量によつてのみ決定される。従つて、この労働量がより大になれば（しかも、その場合こそ前述の場合に当るものである、というのは、年々従業する労働者の数は不変のままであるが、不変資本の生産に

投下された労働の大きさは一〇〇価値単位だけ大になつたからである、生産物の価値もそれに応じて増大する、」とツガンは説明する。⁽³⁾

換言すれば、ツガンにとつては、資本の生産物であろうと、単純商品であろうと、「投下労働量」によつて決定されると、「マルクスの価値論」を理解している。従つて、資本の生産物の価値は、「価値法則」が、「生産価格」の法則に「変様」Modifizieren されるということなど、どうでもよいことなのである。このような、ツガンの「価値論」の理解は、「立派な数学者」ポルトキヴィッツを唯一の「援軍」と頼むことを必然にする。⁽⁴⁾

(2) 方法論および表式の「前提」の吟味。

ブーダンは、「社会的諸現象を全然黙殺して、社会法則を論理的数学的公式や計算で証明できない」ということに對して、ツガンは、彼の「表式」の「方法論的意義」を次のように説明する。

すなわち、社会的利潤率の変動が問題になつている場合に、「資本制経済の全体」を研究せねばならぬ。ところが、「社会経済の種々なる部分の連関は数量的性格をもつ。」「だがこのような数量的連関の本質およびその意義は数学の援用以外によつて、如何にして把握されるだろうか？」その際に、数学的分析は何も高等数学でなくてもよい。それ故、ツガンは「資本制経済の全体を現わす一箇の擬制的な数字の例証 ein fiktives Zahlenbeispiel」を「経済的分析の方法」として採用する。しかも「このような表式は社会的生産物の価値実現条件を明らかにするためには不可欠である。私の意見によれば、かかる表式は抽象的経済的分析の基礎にならねばならぬ。」従来の経済理論が不十分だつたのは、この「表式」を使用しなかつたからである、とすらツガンは云う。だが、この「表式的方法」なるものは、ツガンの独創ではなく、ケネー、マルクスのものである。ところが、マルクスは、「第三卷が第二卷以前のマルクスの業績」であるために、「資本論」の第三卷では、「表式的方法」を使つていない。それで、ツガンは、マルクスを

「補充」するために、「資本論」第二巻の「表式」に「若干の変更」を加えて、「利潤率の変動」を研究することによつて、「利潤率の傾向的低落の法則」を「修正」しようとするわけである。

そして、ツガンの加えた「若干の変更」なるものも、二部門説を三部門説に「変更」しただけであるから、ツガン「独自の事業と見做しうる程重要なものではない」と謙遜している。従つて、「若干の変更」にも拘わらず、マルクスの「表式的方法」を採用する限り、ツガンは、自ら「マルクスを吾が師と呼ぶ」権利をもつ、と主張し、それ故、ツガンの「表式」に対する非難は「マルクスにもむけられたものである」という。更に続けて、「すべての数字は私の表式では任意のものである——丁度マルクスの数字と同様に。私は私の表式において、現実に毫も即応しないような極めて多くの仮定をした、——だが同じことはマルクスの表式にも妥当する。」だが「現実に毫も即応しないような仮定」と云つても、「研究すべき現象に無関係なすべての事情」を「捨象」するのであつて、このような「孤立化方法」は「研究すべき現象ないし、それと関連する何らかのものを排除する」ようなことはしない。「表式は特定の経済体制内部の可能的なものの限界を示す。」それ故「かかるすべての結論は容観的妥当性を示す。」表式は「前提された仮定の下で数学的に可能なことを立証する。」かくて表式は「社会経済の法則にかんする厳密な結果をもたらすことを可能にする。」「このような社会経済の全体の表式的觀察は、普通の孤立化方法、すなわち、経済学の普通の抽象的演繹の一その発展に他ならない。だが、いまやすべての経済論はこの方法の利用を基礎にしている。」⁽⁵⁾

このようなツガンの「表式」の「方法論的意義」を、ブータンが理解したら、ツガンの「表式」に対して異論はない筈だ、とツガンは反駁する。

次に、ツガンが蓄積を無視している、というブータンの批判に対して、ツガンは、このことは「私の目的に適合しているからだ、」と答える。何故なら、「資本蓄積は利潤率に絶対に an und für sich 何ら影響しないから、」資本蓄

積なる条件をツガンは「表式」にとり入れていないのは当然である、と主張する。⁽⁶⁾

更に、ツガンは、資本の構成を三部門間であるいは等しくしたり、あるいは不等にしたりしているというブーダンの批判に応じて、マルクスも「資本論」第二巻ではそうしている、という。そして、ツガンの「表式」は「資本の平均的構成の変動が平均利潤率に如何なる作用を及ぼすか」ということを問題としているのだから、三部門とも同一と「仮定」するのが当然である、と答えている。⁽⁷⁾

最後に、ブーダンの「資本が利潤の一部分の蓄積によつて、何故増加せずに、減少するか」という疑問に、ツガンは次の如く答えている。

「それはブーダンが不思議に思う程、むずかしいことではない。……新しい生産手段の導入は、私見によれば、労働生産性の著しい増大を伴なう。生産物の各単位の労働価値は（従つて、資本の一単位も）著しく減少する。それ故新しい、その量だけ増大せる総資本は、以前の、その量だけ減少せる資本よりも、より少ない労働を要する。資本家は、その資本の生産費において、量としては増大せる総資本の価値をも減少させる程、節約した。だが彼らはそれにおいて——ブーダンが資本家の没落を保証するにも拘らず——何ものをも失われず、かえつて多くのものを得た。何故なら、資本家の価値の減退はまさにその利潤の増大を意味する、——すなわち、生産手段に費用が少なくなかれば少ない程、資本家の生産費を補つて余りある純生産物が大となる。資本の減少の際の資本家のもうけは、賃金の切下げ——それは、他の事情にして等しければ、賃金資本を減少させる——の際の資本家のもうけと同様に、何ら特別なものを自らの中にもつていない。」⁽⁸⁾

換言すれば、ツガンのブーダンに対する反批判は、「資本論」の著者が、すでに、「利潤率の傾向的低落の法則」を阻止する要因の一つとして指摘している「不変資本の諸要素の低廉化」を、ツガンは「利潤率上昇の理論」の唯一の

根拠としているということに他ならない。⁽⁹⁾

第二の論点——「資本制生産のための販路欠乏の理論」——に移ろう。

ツガンは、ブーダンの論点に坎する批判を、反批判するために、再び、「表式」の「方法論的意義」を強調する。「消費手段に対する社会的需要の減退なる場合に、社会的生産物の同等量もしくはそれどころが増加量さえもの実現の不可能ということは、一つの数学的性格をもつように思われる。従つて、ここでは、そのことは、社会経済のあれやこれやの歴史的形態の諸条件に依存するところの社会的に不可能なことが問題なのではなくて、如何なる経済形態にも妥当する不可能性を問題にすることを意味する。⁽¹⁰⁾」

すなわち、社会的消費の減退する場合に、価値実現が、可能か不可能か、という問題は「如何なる経済形態にも妥当する」「数学」の問題であると、ツガンは云う。それ故、ツガンは、「数学的表式」を使つて、「資本制生産のための販路欠乏の理論」を批判して、ついでに、資本主義の崩壊の「純粹に経済的」に証明することが不可能であることも「証明」しようというのである。

ツガンは、更に続けて云う、——「論争の対象となつてゐる問題のこのような提起は、消費手段の生産手段による代置の数学的（或いは機械的、そのことはこの場合には同じ意味をもつてゐる）可能性を、社会生産および消費の均衡を攪乱することなしに、一例を挙げれば、資本主義的（勿論私の術語を以つてすれば、敵対的）経済体制とは別の経済的体制にも照応するということを立証する権利を、私に附与するものである。⁽¹¹⁾」

すなわち、ツガンは、価値実現の「数学的機械的」可能性を「証明」してゐるのである。然りとすれば、ツガンは、ブーダンの非難——ツガンは資本主義の「機械的」崩壊を論じているということ——を全く認めることになる。

さて、以上の如く、ツガンは「表式」の「方法論的意義」を再確認したのち、ブーダンの疑問に次のように答えている。

先ず、「新しい、余分な労働者は全期間にわたつてどこから移ってくるか」というブーダンの疑問に、「労働者階級は自ら増殖する、それ故、余分の労働者を他の世界からつれてくる必要はない。また労賃の低下の場合でも、人口増加は起りうる」と答える。そして更に続ける。——「だが主要なことは、労働者数の増加の諸条件は、私の表式の解決せんとする問題と、何ら共通点がない。この表式の問題とするところは、社会の需要と供給、生産と消費、との数量的関係を発見することであり、ブーダンがやつているようにこのように、問題を提起させる経済学における演繹的方法には全然関知していないのである」⁽¹⁵⁾。

この引用文で見られる如く、ツガンの「表式の問題」とするところは、社会の需要と供給、生産と消費、との数量的関係を発見することであるから、ツガンが「お手本」とする「資本論」第二巻第三篇の問題とする「社会的総資本の再生産と流通」の中での「表式」とは「何ら共通点がない」。何故なら、「社会的総資本の再生産と流通」を研究対象とする「表式にあつては、「解決せんとする問題」は生産と消費の矛盾が如何に行われるか、を「図解」するだけであるから」⁽¹⁶⁾。

次に、ツガンの表式が現実に妥当しないというブーダンの批判に対して、ツガンの表式が「仮想的な場合 der fin-gierten Fall」を「仮定」していることを承認する。だが、これは、ツガンにとつて最も都合の悪い場合を「仮定」しても、ツガンの理論が「崩れ去るものでない」ことを示さんがためであると弁解している⁽¹⁷⁾。

最後に、より多くの機械は「何故」、「何のために」生産されるか、というブーダンの疑問に次の如く答えている。「ブーダンの全ての疑問に対する解答は、彼が、かくも模範的に誤解したところの同じ表式の中に見出しうる」⁽¹⁸⁾。

以上において考察した如く、ツガンのブーダンに対する反批判は、ツガンの見解を変更するどころか、「表式」に対する「確信」を強めている。

だが、彼のこのような「表式」に対する「確信」は、「数学および論理学は内在的な力をもつ⁽¹⁶⁾」という言葉に基づくものであつて、このような「確信」こそ、「現実⁽¹⁷⁾に毫も即応しないような仮定」を許し、「社会経済のあれやこれやの歴史的形態の諸条件」と無関係な「数学的・機械的」「証明」を以つて、「客観的妥当性」を主張せしめるのである。

(1) M. Tugan-Baranowsky, Gesunder Menschenverstand und wissenschaftliche Wahrheit. Eine Erwiderung. Die Neue Zeit. XXVI. Jahrg., 1. 1908. SS. 641-642.

(2) a. a. O., S. 645.

(3) a. a. O., SS. 645-646.

(4) Vgl. L. V. Bortkiewicz, Zur Berichtigung der grundlegenden theoretischen Konstruktion von Marx im dritten Band "Kapital". Conrads Jahrbücher für Nationalökonomie und Statistik. III. Folge. 34. Band. 3. Heft. 1907.

なお、モスコヴィツカも、ホルトキヤイツの「数学的方法」によつて、マルクスの「矛盾」を解決しようと試みている。

Vgl., Natalie Moszkowska, Das Marxsche System. Berlin 1929. Vorwort.

(5) Tugan-Baranowsky, a. a. O., SS. 646. f.

(6) a. a. O., SS. 646-649.

(7) a. a. O., S. 651.

(8) a. a. O., SS. 651-652.

(9) Marx, Das Kapital. besorgt von M-E-L Institut. Bd. III. S. 264.

(10) Tugan-Baranowsky, a. a. O., S. 653.

(11) a. a. O., S. 653.

(12) a. a. O., S. 655.

ツガン・バラノフスキーをめぐる崩壊論争の一考察 佐藤

(13) 前掲拙稿、北海道大学「経済学研究」2、一四一ページ参照。

(14) Tugan-Baranovsky, a. a. O., S. 655.

(15) a. a. O., S. 656.

(16) a. a. O., S. 645.

五、A・パンネコエクのツガン批判

前節でみたように、ツガンは、ブーダン¹の批判によつて、何ら自己の説を変えないばかりか、「表式」に対する「確信」を強めている。それ故、再び、ブーダンと批判対象を同じくして、オランダのマルクス主義者アントン・パンネコエクは、「ツガン・バラノフスキー氏のマルクス批判」なる標題で、一九一〇年の「ノイエ・ツァイト」誌上に、ツガン「崩壊理論」批判を行つた。

パンネコエクのこの論文は、吾々が次節で取上げるツガンの著書「現代社会主義」(ロシア語版、一九〇六年、ドイツ語版、一九〇八年)に全然触れておらず、しかも批判の対象となるツガンの論点が、ブーダンと殆んど同じなので、年代から云えば、後に取上げられるべきものであるが、吾々はここで紹介することにする。

パンネコエクの論文は次の三節からなる。

1. ツガン氏は如何に計算するか。

2. 上昇する利潤率。

3. 崩壊。

以下において順次に紹介を試みることにする。

先ず、パンネコエクは「表式」をどのようなものと理解するか、を見よう。

「経済学における表式は——ツガンが正当にその意義を評価せる如く——幾何学における図形に照応する。表式はそれ自身では何ものも証明せず、ただ実例をもつて図示するにすぎない、しかも、その図示するということによつて、ひとは抽象と代数学とを必要とするその命題を証明することができる。表式は任意に仮定できる、だが全部が仮定できるとは限らない。表式は図示せんとする諸概念の条件を満足せねばならぬ。円の属性を図形で示そうとする人は、彼の図形が円であるように配慮せねばならぬ。表式によつてマルクスの理論について何らかを証明せんとする人は、そのためには、マルクスの理論の根本思想に照応するように配慮せねばならぬ。しかしながらツガン氏は、いわば円にかんする定理の不当性を四角形の証明^①している」。

このような「表式」の理解にもとづいて、パンネコークは、ツガンが、価値と生産価格の区別を理解しないで、利潤率についてもツガンがどのように誤解しているかを明らかにしようとしている。

ツガンの「上昇する利潤率」の説明に対して、パンネコークは次のように批判する。

先ず、パンネコークは自分の「利潤的傾向的低落の法則」の理解を次のように述べている。

「マルクスは利潤率の低落を、不変資本の量の増大から説明する。利潤率は総剰余価値と総資本との比率である。

従つて、それはどんな小学生でも知つていような極めて簡単な数学の規則から續き出される。すなわち、剰余価値量不変のまま——それが現実には搾取率の上昇によつて増大するということは、マルクスは反対傾向として指摘している——不変資本、従つてまた、総資本が増加するとすれば、利潤率は低落せねばならぬ^②」。

ところが、ツガンはこれと反対の結果に到達する。それは何故か？ その理由は、ツガンが不変資本を減少させるからである。不変資本が減少すれば、利潤率が上昇するのは当然である、とパンネコークは云う。「だが機械とか生産手段の量が一そう増大するのに、何故、不変資本は減少するのか？ 労働生産性の向上によつて総価値が減少する

と同じ大きさで材料当りの価値も低下する（とツガンは説明する——引用者註）。それが間違いの源泉なのだ。かくしてツガンが現実社会の発展が労働生産性のかくも急激な増加をもたらし、その結果、増加する機械量の総価値が一そう低落することを証明しえたとすれば、誰もが彼の結論と一致しなければならぬ。……だから実際においてどうなっているかという問題は、計算用の表式によつては解決されない⁽³⁾、とパンネコエクは指摘する。

そして、ツガンは、「資本論」の中の、可変資本が不変資本に対して相対的に減少するのは、労働生産性の発展の別の表現に他ならない、という言葉をも、不変資本の価値が増大せずに労働生産性のみが発展するという風に理解しているが、ツガン自身は「事実、労働者の絶対数が増加するなら、だが一そう強力な程度で労働者により運転させられる生産手段の量および価値も増加する⁽⁴⁾」ことを承認している。

すなわち、マルクスは不変資本の増大の方を、労働生産性の向上より「より力強く作用する要因」として指摘しているのだ、とパンネコエクは理解する。従つて、不変資本の増大以外の要因は、「反対傾向」を生みだすにすぎないとパンネコエクはブーダン以上に明白に論点を規定している。

さて次に、「崩壊」なる節に移ろう。

先ず、パンネコエクの「崩壊理論」が、如何なるものであるかを見よう。

パンネコエクは、ツガン崩壊理論の「結論」を引用する。

「人類は……新しい社会秩序を目的意識的に獲得せねばならぬ、——従つて斗争せねばならぬ」。

このツガンの「結論」にたいして、パンネコエクは云う。

「マルクスは全く同じ見解である。だが一体その相異はどこにあるのか？ ツガンは、人間の、資本主義に対するその増大しつつある正義感、すなわち、資本主義が基本的倫理的（カント的）規範を矛盾することから生ずる反抗に

期待する。マルクスは資本主義に対する労働者階級の反抗の中にこの生産様式の経済的矛盾の作用を見る⁽⁵⁾。

更に、ツガンの「機械論的」崩壊理論を、人間の行為を無視するものである、とパンネコエクは批判している。

次に、「経済的『崩壊』なるものは、吾々に関する限り、いつでも恐慌における経済の崩壊である」とパンネコエクは規定して、「崩壊」が「純粹に経済的問題」として論ぜられるべきものであれば、「もはや資本主義が未来において経済的に不可能かどうかが今や問題ではなく、現実の不断の崩壊、すなわち、恐慌の原因が問題」であると云う⁽⁶⁾。

換言すれば、パンネコエクの「崩壊理論」なるものは、「現実の不断の崩壊すなわち恐慌の原因」にかんする説明なのである。

一方、パンネコエクは「恐慌の意義」については次のように述べている。

「恐慌は大衆をして、その運命の耐え難きことを一そうひどく感じさせ、労働条件の不断の改善を阻止し、かくして、それによつてプロレタリアートの革命化のための、社会主義の到来のための最も有力な要因であると感じさせる⁽⁷⁾。」

さて、以上の如く、「崩壊理論」を「恐慌の原因の問題」と理解して、パンネコエクはツガンの恐慌論「崩壊理論批判」にとりかかる。

パンネコエクは、ツガンの表式が余りに複雑であるといつて、次のように書き換える。

$$\text{I. } 600 \text{ 不變資本 (c) + 300 新価値 (n. W.) = 900 中産物}$$

$$\text{II. } 100 \text{ c} + 100 \text{ n. W.} = 200$$

このパンネコエクの表式は、二部門説をとり、剰余価値と労賃を一緒にして、「新価値」 $n. W.$ で表わし、不變資本

と新価値との比を、二対一とし、II部門が不変と仮定する。I部門の生産物九〇〇のうち、一〇〇がII部門の補填に用いられ、残りの八〇〇が、I部門の拡大に使用されるとすれば、第二年以後のI部は次のようになる。

第II部IIIのI部門	$800c + 400n.W. = 1200$
III	$1100c + 550n.W. = 1650$
IV	$1550c + 775n.W. = 2325$
V	$2225c + 1113n.W. = 3338$ 等々

「限界はこの数字の列にとつては存在しない。生産はこのように、一方消費が不変であるのに、不可能になることなく——地球の鉄や石炭の貯蔵が尽きる迄、——無限に拡大されうる。それとともに、資本主義における生産は消費とは無関係なことが証明される。これがツガン式の論証の内容なのである」⁽⁸⁾。

ところで、このような「ツガン式の論証」の「数字の意味」は、一人の男が一〇〇マルクの借金を返すとき、金貸しから一一〇マルク再び借金して、利子とも返済し、一一〇マルクを返済する際に、更に別の金貸しから一二〇マルク借金して返済するというやり方であり、「信用」が無限に与えられるということを「前提」している、とパンネコエクは指摘している。

そして、ツガンの理論は、新しい負債によつて古い負債を返済するという「ロシアの財政政策」を「実例」として用いるものであり、「資本主義の必然的崩壊のみならず、ロシアの財政政策の必然的崩壊まで、科学的数学的に論駁している」⁽⁹⁾。とパンネコエクは、ツガンを皮肉っている。

- (1) Ant. Pannekoek, Herrn Tugan-Baranowskys Marx-Kritik. Die Neue Zeit. XXVIII. Jahrg. I. S. 774.
- (2) a. a. O., S. 774.

- (3) a. a. O., S. 779.
- (4) Tugan-Baranowsky, Theoretische Grundlagen des Marxismus. Leipzig 1905. S. 228.
- (5) Pannkoek, a. a. O., S. 780.
- (6) a. a. O., 780. 「恐慌論」の恐惶論をいふは Vgl. Pannkoek, Theoretisches zur Ursache der Krisen. Die Neue Zeit. Jahrg. XXXI. 1. 1913.
- (7) (8) (9) a. a. O., 780.

六、ツガンによる「窮乏化理論」批判

以上の節において紹介したツガンをめぐる論争においては、「利潤率の傾向的低落の法則と恐慌論」崩壊理論とが主たる論点であつた。だが、ヘルンシュタイン・カウツキー論争には、いま一つの論点、すなわち、「資本制蓄積の一般的法則」が、ツガンの前には解決さるべく残されている。本節では、ツガンが、どのようにして「資本制蓄積の一般的法則」を批判するか、を取上げよう。

ツガンは、一九〇五年の著作「マルクス主義の理論的基礎」において、唯物史観、価値および剰余価値説を「批判し、更に、「利潤率低落の理論」と「資本制生産のための販路欠乏の理論」という「崩壊理論」の二つの「理論構成」を批判し去ることにより、道德的崩壊理論を樹立する。そのために、ツガンにとつて、なお障碍をなすものは「資本制蓄積の一般的法則」と「科学的社會主義」の「科学性」である。ツガンは、一九〇六年にロシア語で發表せる「歴史的発展における現代社會主義 Sovremenny' Sotsializm v svoem istoricheskom razvitiu」(サンクト・ペテルブルク、一九〇六年)でこの障碍をも除去しようとしている。この書物は、一九〇七年六月の日附を有するツガンの「序文」を附して、一九〇八年に、ドイツ語で發表された。

その序文の中で彼は云う、——「私の確信するところによれば、マルクス主義は、社会主義のすべての科学的要素を汲みつくしていないので、……この中に、現在では過去のものとして葬り去られた所謂空想的社会主義の諸学説をも取り入れなければならない」と。

本書において、ツガンは、先ず「序説」で社会主義の「定義」から始めている。そして第一篇では、資本制経済秩序を批判する諸学説を取り上げ、これにツガン自身で批判を加えている。第二篇で、社会主義を「分類」する。第三篇で、社会主義実現のための「戦術」および「綱領」をめぐる諸学説を紹介している。

吾々は、前述の目的のために、第一篇に紹亮の焦点をおく。

第一篇は三つの章からなる。すなわち

第一章 不労階級による労働階級の搾取。

第二章 生産および所得の集積と労働階級の窮乏化。

第三章 文明の欠陥と資本制経済の一般的評価。

第一章は、主として「剰余価値説」の批判であるが、吾々はツガンの価値説の紹介は他日を期することにして、本節では取上げないことにする。⁽¹⁾

従つて、第二章および第三章における、ツガンの「窮乏化理論」批判、および恐慌論・崩壊理論批判を以下に紹介する。

ツガンは第二章において、「資本論」第一巻の「資本制蓄積の一般的法則」を述べた有名な箇所を引用し、マルクスはそこで「絶対的窮乏化理論」を述べているが、マルクス自身は「工場立法」に賛成し、「労働日の法律上の短縮を労働運動の最も重要な目的の一つと見なしている」。それ故、「資本論」の中には、「労働者階級の生活水準の向上

の可能性」を承認するようないろいろの章句が見られるので、これは『資本論』の著者の矛盾』を示すものである。とツガンは云う。

然らば、ツガン自身は、その「矛盾」をどうして解決するか？

十九世紀の前半は、資本主義の発表は、労働者階級の状態を著しく悪化した。すなわち、ツガンによれば「絶対的窮乏化理論」は、十九世紀の前半においてのみ妥当するのである。ところが、「資本主義的産業のより一そうの進歩はある程度まで労働者にも有利である」。

その理由を次のように説明する。

先ず、工場生産が未だ支配的でなかつた時代では、労働の生産性の向上は、工場生産物の価格を低落させ、その結果、工場生産と競争関係にある手工業の生産物の価格を一そう低落させる。かくして小生産者は、利潤も減少し破滅する。そこから生じた失業者の大群が、工場生産の労働者の賃金を圧迫して、労働者の状態を悪化させる。これがツガンの十九世紀前半の労働者階級の状態悪化の説明である。

しかれば、工場生産が支配的になつた場合に、「労働者にも有利である」という理由は何か？

ツガンは、こう説明する、——労働の生産性が向上すれば、生産物総額が増大し、労働者の「勢力」が、「工場立法、労働運動および協同組合運動」によつて増大するから、総生産物の「分配」が有利になる、と説明する。

ツガンは、一そう詳論する。すなわち、「工場立法」によつて、労働日の無制限の延長および児童労働が制限され、労働者は「閑暇」を得て「この閑暇を精神的および社会的活動によつて先たす可能性」が増大する。その上、労働時間の短縮のために、「一定の労働の遂行のためには、より多くの労働者数が必要」となるから、労働者に対する需要も増大する。

また「協同組合運動は消費者としての労働者を商人の勢力から解放」する故に、労働者の生活水準はますます向上する⁽³⁾。

このように説明して、ツガンは、十九世紀の後半では「絶対的窮乏化理論」を否定する。すなわち、ツガンは、「対絶的窮乏化理論」を放棄することによつてマルクスの「矛盾」——すなわち、「絶対的窮乏化」か「労働者階級的生活水準の向上の可能性」か——を「解決」する。

ところが、「現代マルクス主義の理論的巨頭」カウツキーは、この「絶対的窮乏化理論」を放棄するという「勇氣」を欠いている、とツガンは、批判の矛先を転ずる。

すなわち、吾々が、第一節で見た如く、カウツキーは、「相対的」窮乏化理論を称える。そして「窮乏」は「社会的」なもので、「相対的」であるという。このカウツキーの「相対的窮乏化理論」を次のように批判する。

「彼によつて展開せられた社会的窮乏化理論が真のマルクス理論以外の何ものでもないという主張は決定的に正しくない。マルクスが云うところの窮乏は、カウツキーが、窮乏化理論を説明しているような労働者の諸要求の増大は決してない。マルクスの意味での窮乏の増大は、労働者階級の欲望の増大と決して同じ意味ではない。『共產党宣言』の著者の立場からすれば、労働者は『被救恤的窮民になる』のだから、労働者階級の諸欲望の増大については何ら問題にならない」。

このようなカウツキー批判に続けて、ツガンは「資本家の富の増加は、『資本論』によると、『貧困、労働苦、奴隷状態、無知、野蠻および道德的墮落の蓄積』である」から、労働者階級は、「自己解放」できないと推論する⁽⁴⁾。

ここでも、ツガンは、「貧困、抑圧、隸屬、頹廢、搾取の度合の増大」と並んで、「資本制生産過程そのものの機構によつて訓練され、結合され、且つ組織されるところの労働者階級の叛逆の増大」の一方を放棄する⁽⁵⁾。

このように、ツガンは「窮乏化理論」を批判したのちに、第三章「文明の欠陥と資本制経済の一般的評価」に移る。ツガンは、「文明の欠陥」の最大のものとして「週期的経済恐慌」を挙げる。ツガンによれば「マルクスは、資本制生産の運動を停止させしきもそれによつて資本制秩序に止めを刺すような慢性的恐慌を未来に予想している」という。だが「むしろ正当な理論も實驗も、資本主義の発展は資本制産業の生産物に販路にとつて何ら新しい障碍を生み出さないことを教える」が故に、「マルクスの期待は絶対に實現されない」とツガンは批判する^(c)。

そして、マルクスは「社会進歩の基本的決定的要因として、経済的労働の物質的諸条件の発展を認めるという。社会的唯物論の教義」を出発点として、「資本制秩序の胎内から社会主義的秩序の発展への一般的公式」を構成しているが、その中には「一定の深刻な矛盾がある」とツガンは云う。すなわち、マルクスは「学者および思想家として、すなわち、客観的研究者として」、資本主義の経済的発展が、「人間自体、すなわち、組織された社会的階級の意志とは全く無関係に」、資本主義が崩壊することを「証明しようと努力する」、他方、マルクスは「一人の闘士」として、「熱烈な革命家」として、「資本主義的体制の破壊および社会主義的経済組織の創出が、社会的階級——プロレタリアート——の意識的事業でなければならぬ」⁽⁷⁾。

ツガンは、マルクスの「一定の深刻な矛盾」を、「学者および思想家として、すなわち、客観的研究者として」のマルクスの方を棄て去ることによつて、解決する。すなわち、ツガンは云う、——「……社会主義の勝利のためには基本的経済的過程では不十分である、——すなわち、その共同体の歴史的形態へ人間の意識的働きかけによつて補充されねばならぬ。経済的発展への客観的過程に基づく人間の意識された意志のみが、社会主義的経済制度を創り出す」⁽⁸⁾。

このような、ツガンの「科学的社会主義」に「空想的社会主義をとり入れる」という「事業」の成否は、歴史の

「事実」によつて検証されねばならぬ。

(1) ツガンの価値論につらとは

Tugan-Baranowsky, Theoretische Grundlagen des Marxismus. 1905. Absch. II., Wert und Mehrwert.

Derselbe, Subjectivismus und Objectivismus in der Wertlehre. Archiv für Sozialwissenschaft und Sozialpolitik. Bd. XII. 1906.

Derselbe, Soziale Theorie der Verteilung. Berlin 1913.

N. Bucharin, Eine Oekonomie ohne Wert. Die Neue Zeit. 1914.

Derselbe, Die politische Oekonomie des Rentners. 2. Aufl. Anhang. SS. 178-187.

Jürgen Kuczynski, Zurück zu Marx. Leipzig 1926.

(2) Tugan-Baranowsky, Der moderne Sozialismus in seiner geschichtlichen Entwicklung. Dresden 1908. S. 68.

(3) a. a. O., SS. 69-70.

(4) a. a. O., SS. 72-73.

(5) Marx, Das Kapital. Bd. I. S. 803.

(6)(7)(8) Tugan-Baranowsky, a. a. O., SS. 89-91.

七 カウツキーのツガン批判

——窮乏化と崩壊——

ツガンの「現代社会主義論」が、一九〇八年、ドイツ語で発表されるや、カウツキーはこれを、「最も完成せる形態における今日の修正主義の精髓である」となして、「窮乏化と崩壊」なる論文を以つて批判している。

カウツキーのこの論文は、その副題にも見られる如く、「修正主義の最新の段階」として、ツガンの「修正主義」

が、ベルンシュタイン以来、如何なる「進歩」をなしたかを評価しようとしている。そのために、ベルンシュタイン以来の修正主義の武器であつた「窮乏化理論」と「崩壊理論」を取り上げている。

先ず、「窮乏化理論」から始めよう。

ツガンは、カウツキーの「相対的窮乏化理論」を批判して、マルクスの「窮乏化理論」と異なると主張しているが、これに対して、カウツキーは、「賃労働と資本」からの長い引用を行つて、マルクスが「相対的窮乏化理論」を主張していることは「明白」であるとツガンを反駁する。⁽¹⁾

更に、ツガンが、十九世紀の後半において、労働者階級の生活水準の向上に「有利」であるという見方に対して、そのような「改善」は、イギリスの「労働貴族」についてのみ言いうる、とカウツキーは云う。

そして、「労働生産性の向上」が「賃賃を騰貴させる」というツガンの理論に対して、ツガンは、今日、手工業や家内労働が没落して、工場生産が支配的ならば、という「条件」をつけた場合に、「賃賃を騰貴させる」云えるのであつて、現実に、手工業や家内労働は消滅していない。手工業が消滅した資本主義国では、「苦汗制度」が残存し、資本制大工業の征覇によつて、後進地や植民地の手工業、家内労働と競争するようになり、「小経営の没落」によつて生じた賃金圧迫は、今日も依然として支配し、ただそれが国際的性格を帯びたにすぎない。」とカウツキーは指摘する。⁽²⁾

しかも、ツガンは、労働者階級に「有利」な状態を生みだせる「原因」の段になると、「労働生産性の向上」や「小経営の没落」とは何の関係もない。(1)工場立法、(2)労働者の組織、(3)協同組合運動の三つのものをもち出す。このようにカウツキーは云つて、その三つの「原因」をひとつひとつ反駁する。

先ず第一に、「工場立法」はたしかに労働日を短縮させるけれども、労働強化を排除するものでない、と反駁する。

また、「協同組合運動」についても、「樂觀主義者の消費組合論者ですらこの主張の前には、しりごみするであろう」と皮肉り、ツガン自身が、「商業の役割がますます増大する」と云っている箇所を指摘している。⁽³⁾

最後の「労働者の組織」について、カウツキーは詳細に検討を加えている。すなわち、ドイツでは、一八六六年と一八七〇年の「変革」が、資本主義の発展を促進し、資本の急速な増大は、労働者層の組織の条件もつくりだした。しかも、七〇年代は生活資料の安価なために、労働者にとつて有利であつたが、「既に再び後退が始まつている」。それは、労働者保護立法が限界にきていること、労働者階級の権力もブルジョアジーに対して、「相対的」にしか増大しないということ、に現われている。また、七〇年代には、「資本制生産様式の次のような転換が行われた。すなわち、繊維工業が指導的工業たることをやめて、鉄工業および附属工業がますます支配的工業になつた。だがなお成人労働および有資格労働がそこでは支配的であつた。婦人および児童による大人の排除、未教育労働による知識労働の排除は、そこではなお僅かしか現われなかつた」。金属工業の急激な発展は、「最も闘争能力あり且つ組合に組織するのに最も適した労働者層」の増大を見た。このことこそ、「修正主義」を生み出し、「資本論」は繊維工業には妥当するが、金属工業には妥当しない、と主張せしめた事情である、とカウツキーは云う。

そして、「賃金」は変動するものであり、特に、失業と恐慌と云う「ダモクレスの剣」によつて「賃金の下向きの線をたどることに対しては何の保証もない」と論ずる。⁽⁵⁾

また、労働者階級の窮乏化は、労働者階級の勝利を不可能にするというツガンの主張に対して、ツガンは「労働者階級の外部に彼らを解放する原動力を求めんとする」ものであり、労働者階級の窮乏の増大と同時に彼らの勢力も増大するということを「弁証法的に考えることの無能力なること」を暴露する以外の何ものでもない、とカウツキーは批判している。⁽⁴⁾

さて、次に「崩壊理論」に移ろう。

カウツキーは、ツガンをして、マルクスが「慢性的恐慌」によつて、資本主義が「自然に死滅するであろう」と論じていると、考えさせた、マルクスからの引用文を吟味する。

ツガンは、出典を明らかにせずに、次の文章を引用して、ツガンの推論の根拠にしている。すなわち、

「ひとたび一定の運動に投ぜられた天体が絶えず同じ運動を繰返すのと全く同様に、社会的生産も、ひとたびかの交互的膨脹および収縮の運動に投ぜられたならば、絶えずこれを繰返す。……この循環の期間は今日まで十年から十一年を包摂する、だがこの大きさを不変のものとみなすのに、何の理由もない。資本制生産の法則に基づいて、むしろこの大きさが変化し、循環の時間の長さが次第に小さくなつてきていると考えるべきである」。

カウツキーは、この引用文の前半は、「資本論」第一巻の第一版および第四版の五九八ページにあるが、後半は、「資本論」のフランス語訳第一巻の二〇〇ページの註の中にある、と指摘する。そして、「十年間も、マルクスは、修正主義者によつて、つねに勝手なやり方で、全く笑うべき引用文の解釈によつて、このような馬鹿げた見解を押しつけられてきた」。しかも、ツガンの場合には、マルクスのドイツ語の著作の中には、自己の見解に利用すべき引用文を発見できなかったもので、「資本論」のフランス語訳の一つの註を、勝手に結びつけている、とカウツキーは非難する。

更に、「思想家」マルクスと「闘士」マルクスとを区別する仕方を、カウツキーは次のように批判する。

ツガンは云う、——「資本主義が自然に死滅すると予想することには、何らの根拠もない、——すなわち資本、主義は人間の意識された意志によつて粉碎されねばならぬ。資本によつて搾取される階級——プロレタリアート——に

よつて粉碎される」と。

だが、マルクスは、ツガンの「現代社会主義論」よりも六〇年も昔に、「共産党宣言」の中で、「ブルジョアジーは、彼らに死をもたらす大衆しか鍛えない。彼らは、この大衆を指導する人々——近代的労働者、すなわち、プロレタリアート——を産み出したい」と述べており、しかも、ツガンは、「共産党宣言」から、約一ページ程も引用しておきながら、この文章の直前で中止していることをカウツキーは指摘する。更に、ツガンは「あたかも、階級が人間からなりたつていないかの如く、また階級利害が『人間の意識された意志』から発するのでなく、階級闘争がかかる意志なくして行われるかの如く」考えている、とカウツキーは論断している⁽⁸⁾。

そして、最後に、ツガンは、「運動がすべてであり、究極目標は無である」というベルンシュタインのモットーを引くりかえて、社会主義運動に「究極目標を与えよ」と云つて、「空想的社会主義」から「未来国家」を借りてくる。これこそ「修正主義の十年間の理論的成果」である、とカウツキーは「修正主義の最新の段階」を評価する。そして、修正主義は、プロレタリアートの「輝かしき成果」を承認せざるをえなくなつてきていると論定する⁽⁹⁾。

以上の如き、カウツキーのツガン批判をもつて、ツガンをめぐる論争は一応終り、「修正主義者」と「正統派」マルクス主義者との「崩壊論争」は、ローサ・ルクセンブルクの「自動的崩壊論」をめぐる論争に移つてゆく。

- (1) Karl Kautsky, *Verelendung und Zusammenbruch* — Die neueste Phase des Revisionismus, Die Neue Zeit. XXVI. Jahrg. 2, 1908. S. 542.

なお、このようなカウツキーの「相対的窮乏化理論」に対しては次のような批判がある。

Tolokonski-Nowitzki-Jakobson, Das allgemeine Gesetz der kapitalistischen Akkumulation. Unter dem Banner des Marxismus. IV. Jahrg. Hef. 1.

D. Rosenberg, *Kommentarii k pervomu tomu «Kapitala» Karla Marksa*. 4. izd. 1931. Grava. XXIII.

横山正彦、マルクス主義における失業論、大河内一男編「失業」所収「経済学新大系IV」。

- (2) Kautsky, a. a. O., SS. 543 f.
- (3) Kautsky, a. a. O., SS. 545-546.
- (4) Kautsky, a. a. O., SS. 546-548.
- (5) Kautsky, a. a. O., S. 550.
- (6) Kautsky, a. a. O., SS. 550-551.
- (7) Kautsky, a. a. O., SS. 607-608.
- (8) Kautsky, a. a. O., S. 609.
- (9) Kautsky, a. a. O., SS. 610-611.

八、結 論

さて、ここで、ツガンをめぐる「崩壊論争」の論点を整理し、それがどの点まで展開されたかを確認し、われわれの一応の評価を試みることにしよう。

論争の発端をなすものは、ベルンシュタインによるマルクス主義の「修正」である。とくに、ベルンシュタインは、恐慌の「緩和」ということと、「資本制蓄積の一般的法則」の「修正」ということによつて、「崩壊理論」を拒否せんとする。

これに対して、カウツキーは、「過少消費説」的恐慌論と、「相対的窮乏化理論」をもつて、ベルンシュタインを反駁せんと試みる。

ツガンの「崩壊論争」への介入は、「崩壊理論」の「理論構成」を、「資本制生産のための販路欠乏の理論」「過少消費説」および「利潤率低落の理論」と規定し、これらを「表式」なる数学的武器によつて、批判することによつ

て、ベルンシュタインのマルクス主義の「修正」を側面から援助することであつた。

彼は、資本主義の崩壊を、「表式」を使用することによつて、崩壊の不可能なることを「数学的に」論証し、資本主義が「倫理的規範」に矛盾するゆえに、崩壊せねばならぬと主張する。

「正統派」のブーダンおよびパンネコークは、ツガンの「表式」が現実に妥当しないことを指摘することによつて、「利潤率の傾向的低落の法則」および「過少消費説」を「擁護」しようと試みる。

ツガンのこれにたいする反批判は、彼の「表式」が現実に妥当しないという点を承認するが、その「論理的誤謬」を指摘されていないことで満足する。

かくて、ツガンは、自己の「倫理的」崩壊理論を基礎づけるために、「窮乏化理論」の批判に赴く。その「論証」は、工場生産が今日では支配的だから、「労働の生産性の向上」は総生産物を増大させ、「工場立法」、「労働者組織」、「協同組合運動」の普及によつて、労働者にとつて有利に総生産物が分配されるということであつた。このように「崩壊理論」の主要な内容を全部否定することによつて、ツガンは、空想的社会主義から借りきた「未来国家」を「究極目標」において、労働者階級に闘争を訴える。

このようなツガンの「窮乏化理論」批判に対して、カウツキーは、ベルンシュタイン批判に用いた「相対的窮乏化理論」をもつて、再び立向う。そして、「労働の生産性の向上」ということは、労働強化を排除するものでないこと、また「工場立法」、「労働者組織」などによつて利益をうけるのは一部の労働者階級、とくに労働貴族であることを立証すべ。そして、このような労働貴族の存在こそベルンシュタイン派の修正主義の基礎であると指摘する。

さて、以上の如き、ツガンをめぐる崩壊論争の発生のは必然性は、資本主義の新しい段階、すなわち独立段階の資本主義に基づくものである。従つて、それに基づいて発生する新しい諸現象は、資本主義の全体制との関連から切りは

なして、一面的にとり出してきた事実を、皮相に一般化することによつては、理解できない。

ベルンシュタインの「恐慌の緩和」にかんする「修正」の試みは、一九〇〇—一九〇三年の恐慌という「事実」によつて反駁され、ツガンすら反対することである。¹⁾

しかしながら、カウツキーの「過少消費説」的恐慌論や「相対的窮乏化理論」は「科学的」経済学の内容をなすものではない。このようなカウツキーの不徹底な修正主義批判こそ、ローザをめぐる論争——本稿においては、カウツキーの過少消費説がブーダンを媒介にして如何にしてローザに引き継がれたかを指摘した——を生み、またブーハリーンをめぐる論争、グロスマンをめぐる論争を生みだし、我が国においても、これらの論争が再生産されたゆえにある。

われわれは、資本制経済秩序の、より高度な、他の秩序への移行の法則を、現実の「生きた生活の矛盾」として暴露することが、われわれの問題とする「崩壊理論」の内容であると考える。

そのために、「労働者階級の運命」を問題する「資本制蓄積の一般的法則」の作用が、労働者階級を「絶對的に貧困化」させることによつて、資本主義的経済秩序がより高度の秩序に移行する「客觀的条件」を作り出すことを分析せねばならぬであらう。

従つて、ツガンの如く、「表式」によつて、「数学的に」「証明」を与えても、それは、事実そのものについて何も語るものではないであらう。

- (1) Vgl. Tugan-Baranowsky, Studien zur Theorie und Geschichte der Handelskrisen in England, Jena. 1901. SS. 414-415.

一九五四年三月